

年		日本・世界の動き	中田重治師及び聖潔派を中心とする キリスト教会の動き		中田羽後師の歩み	荻窪栄光教会
1870年	明治3年		重治師、青森県弘前市（旧津軽藩）の士族（足軽）の中田家の三男として生誕。			
1888年	明治21年		重治師、弘前美以教会にてG.ドレーバー師より受洗。			
1896年	明治29年		<b>重治師渡米。シカゴのムーディ聖書学院に学ぶ。</b> ムーディー聖書学院では、奉仕のための聖霊の力、聖霊のバプテスマを強調。中田重治師は深い感化を受けた。	0才	<b>中田羽後師、秋田県大館にて、中田重治、カツの次男として生誕。</b>	羽後の国（秋田）に生まれたので「羽後」と命名。
1897年	明治30年		インドからV.D.ダヴィッドという宣教師がムーディ聖書学院で集会を行った。重治師はその夜、泣いて祈る中で完全なる神への明け渡しをし、潔めの自覚（聖霊体験）が起こった。			
1898年	明治31年		帰国し、弘前に落ち着く。松江のバックストーン師を訪ねる。			
1899年	明治32年		メソジスト教会から伝道師に任命。			
1900年	明治33年			4才	家族に連れられて上京	
1901年	明治34年		中田重治師はメソジスト教会を脱退し、留学中に学費を支弁したカウマン夫妻とともに東京神田に「中央福音伝道館」を設立、4月には「聖書学院」を開校。「 <b>四重の福音（新生、聖化、神癒、再臨）</b> 」を伝えるホーリネス運動を開始			
1903年	明治36年			7才	神田錦華尋常小学校に入学	
1904年	明治37年	日露戦争	聖書学院が新宿の柏木に移転。			
1905年	明治38年	満州、朝鮮半島などアジア諸国への宣教とともに、米国人宣教師と協力し、米国内での宣教活動も積極的に行う。	神田の基督教青年会館にて「聖書の純福音宣伝大会」開催。「四重の福音（新生、聖化、神癒、再臨）」に基づく、福音伝道、聖潔、再臨、神癒の集会が行われ、中田重治師が説教。音楽が多く用いられ、1500名の会衆を集めた。 日本各地に福音伝道館ができ、聖書学院も移転・新築される中、中田重治師はカウマン夫妻らとともに、これらを統一する名称と組織として「 <b>東洋宣教会</b> 」を設立。			

年		日本・世界の動き	中田重治師及び聖潔派を中心とする キリスト教会の動き		中田羽後師の歩み		荻窪栄光教会
1909年	明治42年		中田重治師は坂井勝次郎師とともに「 <b>リバイバル唱歌</b> 」を発行	13才	同校卒業、青山学院中等部に入學		
1911年	明治44年			15才	母かつ逝去 重治師、今井あやめと再婚	母かつの逝去数日後、米田豊師（聖書学院教師）の導きで詩編32篇「汝の御手は夜も昼もわが上にありて重し」のみことばにより <b>罪を悔い改め、新生を体験</b> 。	
1914年	大正3年	第一次世界大戦勃発		18才	同校卒業、聖書学院に入學。		
1917年	大正6年		10月、東洋宣教会が聖書学院で開かれ、東洋宣教会は「 <b>東洋宣教会ホーリネス教会</b> 」となり、 <b>正式な教団組織を設立</b> 。中田重治は新教団の <b>初代監督に就任</b> 。 所属教会数は、国外2箇所（満州の撫順、大連）も含め46箇所となり、全国規模のものとなった	21才	伊豆大島へ渡る。 安倍千太郎師の導きにより全き献身に導かれる。 その後、復学し聖書学院を卒業する。	きよめが分からなくなり、懐疑心と虚無感、ニヒリズムに襲われた結果、ある時、親友の修道生とけんかし大げがをさせてしまい、伊豆大島行き船にのり、大島で無人のぼろ小屋に住みながら自殺をしようと考えた。大島で伝道をしていた日本ホーリネス教会伝道者である安倍千太郎師の導きにより <b>全き献身</b> に導かれ、「 <b>賛美をもって仕えなさい</b> 」との <b>神のみ声を聞き、教会音楽をもってご奉仕に立つ決心</b> をした。	
1918年	大正7年			22才	日本ホーリネス教会の牧師になる。		
1919年	大正8年		中田重治監督の指導の下にあった日本のホーリネス教会（東洋宣教会ホーリネス教会）で大規模なリバイバル（信仰復興運動）が起こり、「 <b>ホーリネス・リバイバル</b> 」と呼ばれた。	23才	渡米。ロサンゼルス聖書学院に入學。	ロサンゼルス聖書学院の合唱隊に参加してメサイアを歌う。また初めてのパイプオルガンの音に歓喜・感激した。	
1920年	大正9年		1920年3月には東京聖書学院で、秋山由五郎、御牧碩太郎、中田重治らが発起人になって、超教派の日本全国リバイバル集會が持たれた。	24才	ロサンゼルス聖書学院をやめ、父・重治師の巡回伝道について独唱。  その後、シカゴ・ムーディー聖書学院に入學。	父・重治が渡米した際に、ロサンゼルス聖書学院をやめ、父の巡回伝道に付いて回り独唱した。シカゴのオースティン組合教会で共にメサイアの演奏を聞く。父・重治はメサイアに深い感銘を受けた。特に <b>23番アルト独唱「悲しみの人なる彼は」に重治師は涙を流して感動</b> 。（中田師著「父の涙」に詳述） それがきっかけとなったかどうか、それまで音楽を学ぶこと（学問）に反対していた重治師は羽後師を11月にシカゴのムーディ聖書学院に連れて行った。そこで羽後師は聴講生となることがゆるされ、音楽を学ぶことになった。	
1921年	大正10年			25才	4月 シカゴ音楽専門学校で音楽を学ぶ。 9月 帰国途上ロサンゼルス北米ホーリネス教会の最初の受洗式に出席した後、父と共に帰国。		

年		日本・世界の動き	中田重治師及び聖潔派を中心とする キリスト教会の動き		中田羽後師の歩み	荻窪栄光教会
1922年	大正11年			26才	「リバイバル唱歌」を改訳、再編し「 <b>リバイバル聖歌</b> 」を出版。※1	
1923年	大正12年	関東大震災		27才	関東大震災の直後、ピリー・サンデー氏の聖歌指導者ロードヘーバー氏が来日。彼の勧めに応じて再び渡米する。 ウィリアムソン氏のウェストミンスター合唱学校、ガン音楽学校、シカゴ音楽大学、ノーザン・バプテスト神学校などに1927年（昭和2年）まで学び、学位を修得した。	ウェストミンスター合唱学校で、ボディービル〜柔軟体操〜腕立て等、徹底的に体を鍛えられるとともに歌う時の体の使い方を学んだ。また教会聖歌隊についての「ウェストミンスターメソッド」と呼ばれるメソッドを学んだ。シカゴ音楽大学では、発声法・声楽を学び、ノーザン・バプテスト神学校では旧約学を学んだ。ガン音楽学校で教会音楽の作曲と指揮法と解釈、作曲と管弦法を学んだ。
1925年	大正15年		満州、朝鮮半島、樺太等における邦人伝道、ブラジルの日系人伝道も開始。ホーリネス教会は上海やシンガポールにも進出。台湾山岳地やパラオ島にも宣教師派遣。			
1927年	昭和2年			31才	今井朝子と結婚。帰国。	
1928年	昭和3年		ホーリネス教会は東洋宣教会から経済的に自立、日本ホーリネス教会と称するようになる。	32才	大森ホーリネス教会を牧会。	人は集まるけれども献金は集まらず、牧会に追われ、教会音楽家として立つ希望は全く壊滅していた。
1929年	昭和4年	世界大恐慌				
1930年	昭和5年		東京聖書学院での熱心な祈りから <b>リバイバル</b> が起こり、都内のホーリネス教会に広まり、 <b>全国のホーリネス教会に広がっていった</b> 。全国各所でリバイバルの名に寄る集会が開かれた。			
1931年	昭和6年	満州事変勃発	海外からも多くの教職、信徒が参加した。主の再臨がそれまでになく強調された。聖書学院にて4月に再臨準備ホーリネス大会開催。10月には御牧碩太郎、中田重治、土山鉄次が大会委員となって「全国リバイバル大会」が開催された。	35才	ホーリネスを大会の <b>集会途中で退会を命じられ、聖書学院を去る。荻窪の現在の地に移転。</b>	ホーリネス・リバイバルの最中に父・重治から、「 <b>流れに添わぬ</b> 」という理由で <b>ホーリネスの退会</b> を命じられ、聖書学院を去る。義母あやめとの確執が原因であったと言われる。その後、神経衰弱を病む。
1932年	昭和7年	満州帝国成立五・一五事件	ホーリネス教会は急成長して、 <b>1930年には、4300名の受洗者</b> があり、 <b>1932年には434教会、19,523名の信徒</b> を擁する団体に、 <b>数年で2倍以上に成長した</b> 。 一方で、再臨待望の熱心のあまり行き過ぎが見られ、幹部からも離脱者が現れた。神社参拝問題のために迫害を受ける事例が全国的に多数起きた。	36才	東京ヴォランティア・クワイア発足。 「 <b>リバイバル聖歌</b> 」改訂版を出版。 重治からは <b>戸籍上でも親子の縁を切られる</b> 。	「 <b>リバイバル聖歌</b> 」を編集、出版する。 また東京ヴォランティア・クワイアにて「 <b>メサイア</b> 」の <b>全曲演奏を実現</b> 。 戦後も同チャペルセンター閉鎖後の晩年に至るまで、合計50数回の「メサイア」公演を続け、今日の「メサイア」時代を作る。

荻窪に家を借り、家では聖歌の編纂、外では中田聖楽研究所、聖学院、青山学院等での教師生活。  
「私はすっかり環境が変わり、静かになった**荻窪の新居で、朝は秋田犬を連れて散歩し、午後は家に居るときは植木いじりをし、夜は聖歌の改作と翻訳と創作にいそしんだ**。一生で最高に幸福な時代であった。」

「リバイバル聖歌」の売り上げによって、住んでいる土地が地主の物納によって没収されるところを、非常な苦心をして買い取った。  
**(後の荻窪栄光教会の場所)**

年		日本・世界の動き	中田重治師及び聖潔派を中心とする キリスト教会の動き		中田羽後師の歩み	荻窪栄光教会
1933年	昭和8年		中田重治師による再臨とユダヤ人問題についての新指針に対する五教授派（委員会派）の意見の相違によって対立が深まった結果、 <b>ホーリネス教会分裂</b> 。			
1936年	昭和11年		「和協覚書」に調印し和解が成立した結果、和協分離。 <b>日本聖教会ときよめ教会の二派となった</b> 。中田重治師はきよめ教会の終身監督となった。			
1937年	昭和12年	盧溝橋事件から日中戦争へ発展				
1939年	昭和14年		中田重治師の死後、長老派少壮派に分裂。その後、長老派は日本基督教団（第九部）に所属。少壮派は加入せず存続。（戦後は東洋宣教会きよめ教会として活動）日中戦争下での宗教団体への政府の統制を目的とした「宗教団体法」が成立。	43才	9月、義母・あやめ、その10日後に父・重治との <b>死去の際に、両者と和解</b> 。	
1941年	昭和16年	太平洋戦争勃発	宗教団体法に基づく政府の強い要請による「日本基督教団」成立。日本聖教会は第六部、きよめ教会は第九部に所属。			
1942年	昭和17年		ホーリネス系3教会の教職者97名が治安維持法違反（神社や皇室冒瀆等の恐れのある団体や個人）の容疑で全国一斉検挙。	46才	「メサイア」邦訳に着手。	
1943年	昭和18年			47才	東京ヴォランティア・クワイアが解散。	戦争中も官憲の圧力に屈することなく、 <b>メサイアの定期演奏会を継続</b> 。
1944年	昭和19年					国内でのメサイアの演奏は不可能になったが、戦時下にあって元団員を集めてJOAK（現在のNHK）から海外放送で継続。
1945年	昭和20年	太平洋戦争終結	戦後、旧日本聖教会（第六部）から日本基督教団・ホーリネスの群れ、ウェスレアン・ホーリネス教団が生まれた。一方、旧きよめ教会（第九部）より基督兄弟団、基督聖協団が生まれた。またホーリネスの信仰を受け継ぐ群れとして、イムヌエル総合伝道団、日本聖泉基督教会連合、東洋宣教会きよめ教会、日本福音教団、日本福音教会連合、日本宣教会が生まれた。			
1947年	昭和22年			51才	GHQ（国連軍総司令部）直属の <b>東京チャペルセンターの音楽職（ミニスター・オブ・ミュージック）としてチャペルセンター・コワイアを指揮</b> 。	

年		日本・世界の動き	中田重治師及び聖潔派を中心とする キリスト教会の動き	中田羽後師の歩み		荻窪栄光教会
1951年	昭和16年		日本福音連盟設立。 (日本イエス・キリスト教団、 <b>日本ホーリネス教団</b> 、 <b>ウェスレアン・ホーリネス教団</b> 、 <b>イムマヌエル綜合伝道団</b> 、日本フリーメソジスト教団、日本ナザレン教団、 <b>基督兄弟団</b> 、 <b>基督聖協団</b> 、日本アライアンス教団、 <b>日本福音教会連合</b> 、日本伝道隊、日本クリスチャン信徒連盟など) このうち旧日本ホーリネス系の教団が6つ含まれる。			
1955年	昭和30年			59才	日本福音連盟第4回総会にて <b>新しい聖歌集</b> の発行が決議。	日本福音連盟にて森山師と中田師が出会った。
1956年	昭和31年			60才	<b>新しい聖歌集の編集委員長に中田羽後師が選出。</b>	
1957年	昭和32年					森山諭師上京、杉並区和田本町にあった西尾春子姉宅にて最初の集会
1958年	昭和33年			62才	「 <b>聖歌</b> 」編纂を完了し、 <b>初版を発行</b> 。11月30日に献納式を行った。	4月駒込に移り、東京教会設立
1960年	昭和35年	米軍引き上げ(帰国)	東京チャペルセンター解散。	64才	彼の <b>土地建物を献げて伝道を開始</b> 。日本イエス・キリスト教団に加入。その教職とせられる。  「森山先生、僕はこの荻窪に来て30年になります。その30年間、この周辺の魂に福音を伝えたいと願いながら、家庭のあかしが立たないために、今もって伝道ができません。妻は船橋で幼稚園を開いています。二人の子供をアメリカへ勉強に出したが、むこうで結婚し、アメリカの市民権をとって日本に帰ってきません。この土地と建物は全部もとより <b>神様のものです。それで全部ささげますから、ここに教会を造ってください。</b> 」	<b>中田師と森山師との摂理的出会いによって、東京教会が駒込から荻窪へ移転、中田羽後師の洋館を教会堂とする</b> 。日本イエス・キリスト教団に加入。
1961年	昭和36年			65才	NHK『みんなのうた』第1回放送の最初の歌として「 <b>おお牧場はみどり</b> 」が放送。	「 <b>おお牧場はみどり</b> 」は、スロバキアやチェコの農村地帯で古くから親しまれていた民謡に、中田羽後師が歌詞をつけたもの。
1962年	昭和37年			66才	北海道にて放送伝道に従事	
1966年	昭和41年			70才	彼の献げた土地における教会建設に努力する。	教会堂献堂式「 <b>日本イエス・キリスト教団荻窪栄光教会</b> 」と改名

年		日本・世界の動き	中田重治師及び聖潔派を中心とする キリスト教会の動き		中田羽後師の歩み	荻窪栄光教会	
1967年	昭和42年			71才	日本の教会音楽に大きな貢献を残し、その功績が認められ11月11日にキリスト教功労者を受賞	キリスト教功労者の顕彰会で、「私は4つの教団を退団または除名され、5つの学校から臆首され、その上、父からも勘当された放蕩息子です。そのような私でも神は見捨てられず、このような生涯を通じて伝道音楽に用いたもうたのであります。」と告白した	
1968年	昭和43年			72才	狭心症のため衛生病院に入院。		
1969年	昭和44年			73才	父・中田重治師を記念して荻窪栄光教会の礼拝堂にパイプオルガンを献納。 月刊「聖歌の友」創刊（主筆:中田羽後師、編集・発行:和田健治氏）。	オルガン献納のため、小著「父の涙」を刊行し、それにより多くの読者からオルガンのための献金が寄せられた。	“中田重治記念オルガン”としてパイプオルガン献納
1970年	昭和45年			74才	心筋梗塞のため聖路加病院に入院。		第1回メサイア公演
1971年	昭和46年			75才	1942年に邦訳したものに29年かけて改訂を重ね、日本語訳「メサイア」完成、出版	三鷹木曜会にて日本語メサイア出版記念公演	
1973年	昭和48年			77才	心筋梗塞のため聖路加病院に入院。（3度目）		
1974年	昭和49年			78才	7月14日 第1回音楽特別伝道集会の日、午後の集会の最中に倒れ、眠るように召天。		

<参考文献及び資料>

「中田羽後師召天二十周年記念誌 中田羽後の信仰と歩み」荻窪栄光教会

「父の涙」中田羽後

「聖歌の友<復刻版>創刊号50周年記念」

「荻窪栄光教会二十周年記念誌」荻窪栄光教会

「荻窪栄光教会50周年記念誌」荻窪栄光教会

「中田重治伝」中田重治伝刊行会

「中田重治とその時代」いのちのことば社

Wikipedia 「中田羽後」「中田重治」「日本ホーリネス教会」「ホーリネス・リバイバル」

「ホーリネス分裂事件」「ホーリネス和協分離」「日本基督教団」

「日本福音連盟」「日本福音同盟」「ディスペンセーション主義」

※1 Wikipediaでは1923年1月1日となっているが、「中田羽後の信仰と歩み」の大正11年（1922年）出版との記述を採用。